

聞こえがいいだけの内容がない「4技能」。大学入試とは何かを問い直してほしい

一貫して民間検定試験の導入に反対してきました。制度の複雑さや、公平・公正性など、いま多く報道されている問題だけでなく、そもそも診断テストに使っていたものを、選抜試験に使うことから来る構造的な問題が大きい。診断テストは問題もリサイクルしていますから、対策すると点があがりやすいのです。目の検査を、あらかじめ記号の位置をおぼえてやったら全問正解できてしまうのと同じ。ところがこれからは、その診断テストに対し、作問者が「対策講座」まで開催するという。マッチポンプもいいところです。

また今回、政治家や推進者が「4技能」「使える英語」といったキャッチフレーズを何も考えずに使っているのも問題です。聞こえだけはよ

いけれど内容のないフレーズで、「面倒な勉強はいや。とりあえず英語ペラペラにして」という消費者心理にうまくつけこんでいる。基礎をやらなかったらぜったいしゃべれるようにはなりません。「話す」にこだわるあまり画一的な授業にするのも問題です。先生には、会話の達人もいるだろうけれど、単語の歴史に詳しい人、読解大好き派もいる。得意分野を生かしてほしい。そのほうが生徒の興味をかき立て、心に残る授業ができます。

今、忘れられているのは入試の本来の役割です。大学に入って勉強についてこられるか、その学力をチェックするのが入試。思考力も問いたい。そのためには読み書きの比重が高くなるのは当然。入試は、民間の

Masahiko Abe

阿部公彦さん
Masahiko Abe

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授。専門は英米文学。民間試験導入反対派の一人として、国会に請願書を提出。著書に「史上最悪の英語政策」など。

英語検定とは目的が異なるのです。

もちろん、英語の運用能力を高めたいという希望もわかります。しかし、それを合理的に実現する方策をまったく考えていない。学校の英語は基礎作りです。車の運転と同じ。教習所で基礎を習ってから、実際の運転のコツは路上で身につける。4技能という枠そのものが「もはや古い」と言われています。実現不可能な「4技能均等ファンタジー」に踊らされるのではなく、きちんとした将来の準備をしたいです。

話すためにも、書くためにも文法を体系的に学ぶことは必要不可欠

旧態依然の英語の入試問題は変えるべきだという意見を持っていますが、ここ4、5年で高校生の英語力に異変があり、4技能教育と4技能試験に疑問を持つようになりました。というのも、高校生に英作文をさせると、We was surprised (be動詞の間違い) や、him book (所有格の間違い) と書くなど、中学で習う英文法の基本中の基本もできていない生徒が、難関大学を狙うクラスにも多くみられるようになりました。原因は、特に中学校でのふたり一組で英語を話す「ペアワーク」にあるとみています。そこでの会話は文法や語彙が間違っても誰にも直されることな

く、そのまま定着してしまっているようなのです。間違えて覚えてしまうと、後から直すことはほぼ不可能です。

「話す」技能を伸ばすためには、伝えたいことは何か、どうすれば自分の語彙力で相手に端的に伝わるか、「考えながら」行うことが大切です。例えば「円滑なコミュニケーションを行うためには聞き手も積極的に会話に参加することが不可欠だ」と言いたい場合、これを逐語訳しては話せません。頭の中で「会話の際には、相手の話をよく聞かなければならない」というくらいに置き換えて、パッと言えなければならぬ。

Hironobu Takeoka

竹岡広信さん
Hironobu Takeoka

駿台予備学校英語講師。マンガ「ドラゴン桜」のモデルとして知られる。文科省内の入試改革に関する委員会にオブザーバーとして出席した。

それには文法を体系的に学んだ上での、英作文の演習が効果的です。前述のようなペアワークでは身につけません。

いい英語の入試問題とは、その生徒がどれだけの量の英文を読んできたか、物事を考えてきたか、歩んできた軌跡が測れるもの。そういう観点での英語の入試問題は残してほしいと思います。